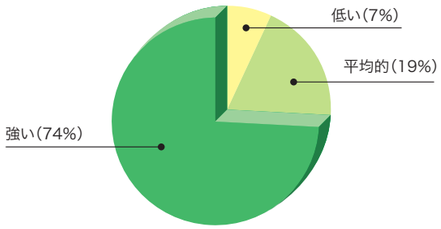
次世代を担う日系人とともに

～「21世紀、日系人であることの意味は？」グローバル若手日系人調査実施～

日系社会が大きく変化する中、次世代の日系社会を引き継ぐ若者は、どのような意識を持っているのでしょうか。日本財団は全米日系人博物館と協力し、世界各地の若い世代（18～35歳）3,800人を対象とした初の世界規模の意識調査を実施しました。その結果、世代が進んでも、日系人のアイデンティティや意識が強く継承されていること、日本とのつながりだけでなく、他国の日系人やコミュニティと横のつながりを広げたい、という若手日系人の姿が明らかになりました。

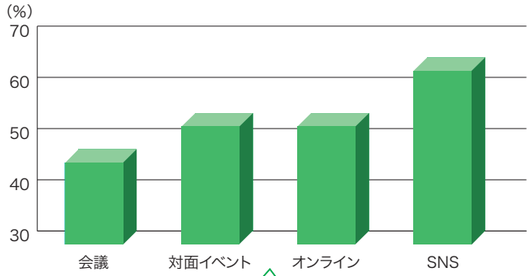
▲プロジェクトメンバー（ロサンゼルス　全米日系人博物館、2019年）

あなたは日系人としてのアイデンティティをどの程度感じますか？



74%の若手日系人は、
日系人としての意識を強く持っている

世界中の日系人とどのようにつながりたいですか？（複数選択可）



若手日系人はオンラインを含めた
様々な形でつながりを求めている

現代の日系人の声に応える新たな取り組み

上記の調査により、多くの若手日系人が他国の日系人とグローバルなつながりを求めていることが分かりました。一方、日常の中では、所属するコミュニティ外の日系人と接する機会は少ないのが現状です。また、他国の日系社会の歩みや、初期の移住者の苦労について知らない層が多いことも明らかとなりました。このような結果を受け、世界の日系コミュニティのハブとなり、日系の歴史、文化、経験や価値観を学び、互いの交流を可能にするオンラインプラットフォーム※の整備を進めています。

※当財団が支援し、全米日系人博物館が運営を行っている日系人向けポータルサイト「Discover Nikkei」<https://www.discovernikkei.org/>は、より使いやすく、双方向のコミュニケーションが可能なサイトとしてリニューアル中です。（リニューアル中もアクセス可能）

One World One Family

日本財団 THE NIPPON FOUNDATION For Social Innovation

日系社会支援についてのお問い合わせは、こちらまで。

日本財団 特定事業部
〒107-8404東京都港区赤坂1-2-2
TEL : 03 -6229 -5111
E-mail : cc@ps.nippon-foundation.or.jp
https://www.nippon-foundation.or.jp/

日本財団 THE NIPPON FOUNDATION For Social Innovation

日本財団が取り組む日系社会支援

2003 若手日系人向け奨学金（2003～継続中）

1986 残留日本人支援（1986～2019）

1974 日系社会支援事業開始 第一号：ラパス日本庭園整備

日本財団の支援

1960 海外日系人連絡協会設立 現（公財）海外日系人協会

1946 海外日系人からのララ物資による支援

所蔵：神奈川県立図書館

1942 第二次世界大戦下における日系人強制収容

所蔵：外務省外交史料館
画像提供：JICA横浜 海外移住資料館

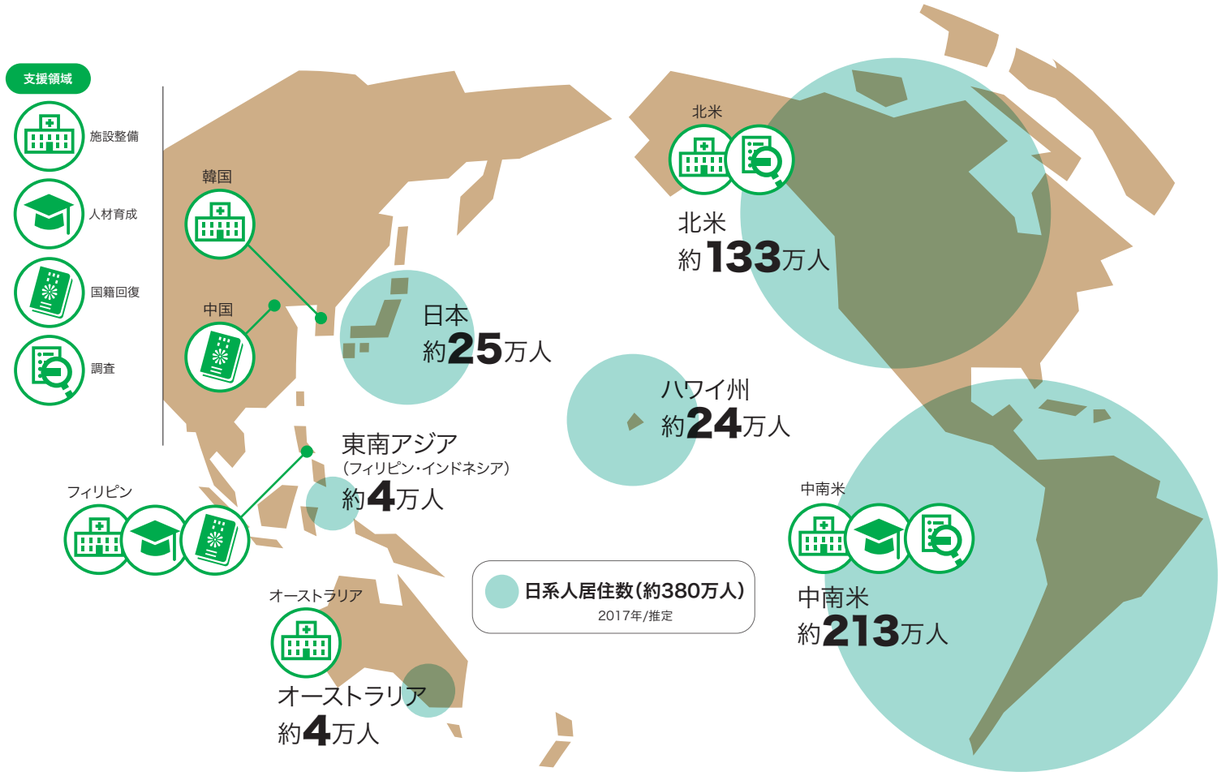
1908 ブラジルへの集団移住開始

1885 ハワイへの官約移民開始 以降国策として海外移住奨励

所蔵：JICA横浜 海外移住資料館

日系社会の歩み

日本財団は50年にわたり、世界中で日系社会支援に取り組んでいます。



日系人とは?

「永住を目的として海外に渡った日本人移住者、およびその子孫」と一般的に定義づけされていますが、移住の時期や背景、居住国は多岐にわたっており、現在では日本にルーツをもつ約380万人が世界中に住んでいます。

私たちの思い

日本財団が1970年代に日系社会支援を開始したきっかけには、移民政策のもと海外で苦労を乗り越え、今日の日系社会の基盤をつくった初期世代の方々に対する労いの思いがありました。現在は、初期世代の支援に加え、日系社会のさらなる発展のために、次世代の育成やネットワーク構築支援も行っています。

支援領域

1 福祉/体育/文化施設の整備

中南米や北米には、移民した日本人が主体となり、互いを支え合うことを目的に設立された日本人会があります。日本財団は、これらの団体に対し、1970年代より40年近くにわたり、老人ホームや病院・体育館・文化センターなどの整備支援を行ってきました。今日では、現地住民から信頼され、日本と現地国の架け橋となる施設として活用されています。

▲日本人ペルー移住100周年記念病院の増設を支援(2009年、ペルー首都リマ)

2 残留日本人支援

日本財団は、戦後、中国・サハリンやフィリピンに取り残され、肉親の詳細や自身のアイデンティティを探し続けている人たちへの日本国籍回復支援を行ってきました。例えば、2006年から2019年にかけて、フィリピン残留日本人2世を対象に、身元調査や証拠書類収集、就籍申立等の手続きや親族対面などのサポートを行い、それまで「無国籍者」として扱われていた方々計249名の日本国籍回復につながりました。

▲フィリピン日系人会の代表より、安倍首相(当時)に早期解決を求める要望書と署名簿を提出(2015年)

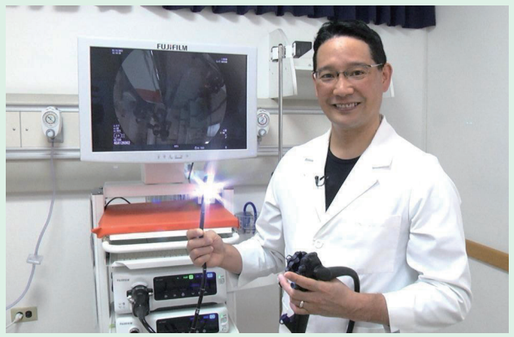
3 次世代への支援

次世代を担う若手日系人が日本に対する理解を深め、母国と日本の架け橋となる人材を育成すべく、日本留学のための奨学金を提供しています。(公財)海外日系人協会を通じて実施する「日本財団日系スカラーシップ」では、中南米やアジア諸国の11か国139名(2022年3月現在)を支援しました。卒業生は医学・教育・日本の芸術文化等の分野で多岐にわたり活躍しており、各地の日系社会ならびに各国地域社会の発展に貢献しています。

▲日本留学中の奨学生は年4回の研修を通し、現代日本社会やリーダーシップを学ぶ

日系スカラーシップ 卒業生インタビュー

岸本グスタボ さん (3期生)
ペルー日本人移住100周年記念病院　消化器内科医師



▲内視鏡を持つ岸本グスタボさん

Q. 自己紹介をお願いします

私はペルーのリマ生まれの日系3世、岸本グスタボです。
日系2世の私の父は47歳の時、ステージⅣの進行性結腸がんと診断され、不安を抱えたまま49歳で亡くなりました。その経験から、私は、早期発見と早期治療を通じて、胃腸がんに苦しむ人をなくすことを志すようになりました。

日本財団日系スカラーシップのおかげで、私は2006年から5年間、東京の国立がん研究センターにて、早期消化管がんの高度な内視鏡治療を学ぶことができました。

Q. 留学の経験が活きていると感じるのはどんな時ですか?

現在、私はペルー日本移住100周年記念病院の消化器内科に勤務し、日本で学んだ内視鏡的粘膜下層剥離術(ESD)を用いた治療にあたっています。留学中に日本の恩師たちから得た人生の指針や数多くの経験は、常に心に留め、人生の支えとしています。

Q. 留学を通して日系人としての意識が変わりましたか?

日本留学により、祖父母の文化への尊敬の念がより強くなりました。祖父母が旅立った沖縄の海を見る機会がありましたが、第2次世界大戦前あの美しい島を離れる決断をした彼らはどのような思いだったか、想像を絶するものがありました。実は私の父は90年代に神奈川県で出稼ぎの仕事をしていました。そして、私は留学を通して21世紀の日本に出会うことができました。2人の息子たちも、日本への関心を育んでいくことでしょう。